様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：１４６０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2023
課題番号：１７Ｋ０３２４６

研究課題名（和文）日本における遊興街の生成・維持―戦後から現在までの都市空間誌―

研究課題名（英文）The Creation and Maintenance of Pleasure Areas in Japan: An Urban Spatial History from the Postwar Period to the Present Day

研究代表者
吉田　容子（YOSHIDA, Yoko）

奈良女子大学・人文科学系・教授

研究者番号：７０２６５１９８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：日本の遊興街（売春街を含む）がどのように形成されてきたのかを，敗戦後に連合国軍が進駐した都市・地域を研究対象として、政治権力やジェンダー、セクシュアリティ、身体の観点から分析・考察した。当時の都市空間は，戦勝・支配／敗戦・従属という国家間の政治レベルの権力関係が表れた場であった。またそこは，進駐軍司令部，地方行政、警察，駐留兵士たち，売春関係の業者や女性たち，地域住民のように，多様な人々の多様な差異から生じた力関係が刻まれた場でもあった。人々の複雑に絡み合った力関係が都市空間に映し出される過程として，遊興街の形成を捉えることができる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ジェンダーとは，社会的文化的につくられた性差であり，それゆえに，男女の力関係が組み込まれたきわめて政治的な概念として捉えることができる。こうした権力関係としてのジェンダーは，地理学が扱う空間や場所に表れることがあるため地図化を試みるが，ジェンダーにまつわる権力関係が空間や場所に潜んでいて，可視化・地図化できない場合もある。いずれにせよ，ジェンダーという視点を用いて，空間や場所に刻み込まれた権力関係を明らかにし，ジェンダーにまつわる権力関係を暴き出すという点で，本研究は意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study analyzed and examined how Japanese entertainment districts were formed from the perspectives of political powers, gender, sexuality, and body in the cities where the Allied Forces entered after the defeat of the World War Ⅱ. Urban space at that time was a place where power relations at the political level between the victorious/dominated country were expressed. It was also a place where power relations born from the differences among various people, such as the Occupation Forces command, local administration, police, stationed soldiers, prostitution-related businesses and women, and local residents, were inscribed. The formation of entertainment districts can be seen as a process by which the complex intertwined power relations among people were reflected in urban space.

研究分野：社会地理学

キーワード：遊興街　都市空間　権力関係　ジェンダー　セクシュアリティ　身体

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

研究代表者は，自身のこれまでの研究において，差別や排除の構造がいかに社会空間に投影されているかを，ジェンダーの視点から解明しようと取り組んできた。そのなかで，研究対象として具体的に向き合ってきたのは，敗戦後の米軍占領時代に日本の各都市・地域に存在した駐留兵用の売春街を含む遊興街である。米軍基地が置かれた沖縄県那覇市，沖縄市，金武町，長崎県佐世保市，神奈川県横須賀市などを事例に，各基地周辺の遊興街を対象に研究をおこなった結果，売春街を含んだ遊興街とは，経済的に困窮した女性たちの性が「商品として消費される」空間であったことを指摘するとともに，こうした空間の生成過程を，遊興街をめぐる諸権力の関係に着目して明らかにした。また，地域社会の中で生みだされ，維持され，人権を脅かすまでに根深く社会の内部に蔓延る差別・不平等の問題をあぶり出し，空間概念や場所論を援用して，人々の多様な関係性を通じて経験される愛着のある（あるいは嫌悪感を抱く）場所の構築過程を明らかにする研究も進めてきた。

上記のような研究をおこなう中で，男女間の非対称構造に起因するジェンダー関係に着目するだけでは，複合的・多層的に構築された社会空間を十分に捉えきれないことに直面した。ジェンダー以外の関係性についても注意深く考察し，差別や排除の構造を，複数の差異軸を用いて分析・考察する必要があることが課題として見えてきた。この課題に取り組む上で，ジェンダー，セクシュアリティ，階層・階級，人種，エスニシティ，年齢などの諸カテゴリーを，相互に関係し，形成し合っているものとして捉えるインターセクショナリティ（intersectionality）の概念は，分析ツールとして有効であると考えられる。日本の地理学におけるジェンダー研究では，とりわけセクシュアリティの視点がいまだ欠如している。また，これまでの地理学では，空間や場所をめぐる議論の中で身体の問題が取り上げられることはほとんど無かった。英語圏のフェミニスト地理学研究では，従来個人的なものとされてきた身体を，社会的・政治的な影響を受ける最も日常的な空間として捉え，身体をめぐる権力関係の解明を通して空間についての理解を深化させている。日本の地理学研究では十分とは言えないこうした視点・観点から，社会空間の分析を試みてみたい。

２．研究の目的

本研究では，差異にともなって生じる力関係の重なり合いを理解するための枠組みとしてインターセクショナリティの概念を援用し，遊興街に内包される諸主体間の権力関係やポリティクスを明らかにする。その際，時間軸を長く取って，明治政府の富国強兵政策によって制度化され各都市・地域に配置された軍隊の存在と遊廓の関係にも着目して分析・考察しながら，敗戦後の連合国軍駐留基地周辺における遊興街の出現やさらにその後の変容について，時系列的に整理していく。敗戦後の駐留兵用の遊興街や，その後の米軍基地周辺の遊興街の設置・展開をめぐっては，様々な立場からのせめぎ合いがあった。ジェンダーに加えてセクシュアリティの視点を採用して身体をめぐる様々な権力に注目することで，都市空間に刻まれた権力の諸関係を明らかにする。

３．研究の方法

新聞はさまざまな情報を提供する媒体であるが，けっして中立な立場を取っているわけではない。とくに敗戦後の米軍占領時代は，戦勝国への不満・批判をあからさまに記事にできなかったこと，また，人権配慮の意識が薄かったことなどから，記事には多くの偏向がみられ，そこに描かれた人々はある種のイメージでパターン化され表象されたと言える。それゆえ，敗戦後の一時期の社会背景や人々の社会意識を知る上で，新聞記事は有効な資料になると考えられる。本研究の方法の一つとして，新聞記事見出し分析を採用した（4.研究成果（３）で紹介）。

４．研究成果

（１）占領期研究におけるジェンダー視点の欠落

日本の歴史学におけるジェンダー研究では，従来の占領期研究について，その分析的見直しがおこなわれている。従来の研究では，占領を，世界史の中に置いて国家対国家の視点から分析してきた。これに対して大越（2005）は，作られた「戦後」の意味体系からジェンダーがすっぽり抜け落ちていること，それゆえ，意図的にジェンダーを欠落したことの「政治性」が問われなければならないことを指摘した。また，菊地（2010）や平井（2014）は，戦争や軍事占領に関する研究をフェミニズムの視点・ジェンダーの視点から問い直す必要性を述べる。占領期における女性の身体の問題に触れた坪井（2018）は，「女性の身体は，占領権力の最も奥深くに接触しており，であるがゆえにこそ，その表象が権力に対する＜抵抗の＞site（場所，現場，拠点）の在所をも示唆する」として，「占領権力のいわば《最前線》に立っていた女性の身体」を議論の俎上に載せた。こうした研究者による占領期研究の分析的見直しを通じて，「彼の物語 his-story」としての「歴史」の表舞台から「女性の物語」が背後に隠されて，すっかり抜け落ちてしまっていたことが指摘され，従来の「歴史」が本当の歴史ではなかったことが暴き出されたのである。

（２）「ジェンダー化された空間」としての軍都

まず本研究では，歴史学におけるジェンダー研究者らの分析的見直しの議論を参考に，明治政

府が進めた「強兵」政策の一環としての軍隊を検討に加えた。明治政府が組織した軍隊を内包した都市空間を，女性の身体やジェンダーの視点から捉え直す必要があると考えたからである。

松下（2013）が「軍隊に遊廓はつきもの，というのが当時一般の通念であった。とりわけ兵営の誘致に奔走してきた有志者にとって，同時に遊廓を設けることは，なかば公然の合意事項のようであった。軍都に不可欠な都市インフラとみなされていたとも言えよう。」と述べるように，日本が軍隊・軍事力の強化を図った明治期から昭和戦前期において，遊廓は軍事拠点としての都市（軍都）に不可欠な存在で，軍隊の配置が遊廓の新設に結びついていた。なぜ「軍隊に遊廓はつきもの」で「軍都のインフラ」であったのか。

当時の軍隊を，生物学的に「男」というセクシュアリティをもつ者のみが所属を許された，「ジェンダー化された空間（gendered space）」の一例とみることができるだろう。それは，軍隊という空間の構成員が男性のみに偏っていることのみならず，男らしさ・男性性（masculinity）の発現が求められる空間である。平井（2014）は，強靱な肉体と精神を備えた「男らしい」男性が異性に向ける性欲は健全で当たり前なものであり，それは抑制できないものだとする「男性神話」にもとづいたセクシュアリティ認識が当時の社会の中にあり，兵士の性欲のはけ口として軍隊に遊廓が必要と考えられたと指摘している。また，軍隊は階層関係が制度化された社会であり，この中で兵士一人ひとりは「男」のセクシュアリティをもつ存在として一元化される。そして戦時には，「男」として「兵士」として一枚岩に組織された軍隊による「暴力」が国家によって正当化されるのである。日清・日露の両戦争を通して，「男らしさ」は国家によってつくり出され強化された。そして，貸座敷免許地を定めて遊廓をつくる目的のひとつは，私娼（国家や自治体からの営業許可を得ずに売春を生業とする女性）の取り締まりである。松下（2013）によれば，軍隊の営門前には私娼窟とよばれる地域ができて兵士が頻繁に利用し，近隣の子どもたちからは非常に「悪い場所」として避けられていたという。子どもの教育環境への影響は言うまでもないが，当時それ以上に問題視されたのは兵士への性病感染で，私娼窟はその感染源として警戒され，軍当局から兵士の出入りを禁じる命令がしばしば出された。他方，公娼制度による遊廓には当時駆黴院とよばれた診療施設があり，娼妓たちは定期的な検診を受けることを義務づけられた。これには，娼妓たちの身体を管理して兵士への性病感染のリスクを軽減するという目的があった。明治政府にとって軍隊の士気低下を招く懸念のある性病から兵士を守ることは，「富国強兵」政策の一端としての軍事力強化（強兵）を進めるうえで必須の課題だった。

本来個人的なものであるはずの女性や男性の身体が，政治権力としての国家や地方行政によって管理されていた。これは，決して女性の健康を守るという観点からではなく，あくまで兵士の性病罹患を防ぎ，軍隊内の士気を維持するためで，このような身体管理が都市空間において具現化されたかたちが，遊廓を一般市民の生活の場から切り離して市街地の外れに設置し，隔離された「安全」な遊興の場を提供するという，近代明治以降の公娼制度による遊廓といえよう。

（３）敗戦後の日本の都市空間はどう描かれたか―新聞記事見出しの分析から―

研究対象は，連合国軍進駐および国連軍駐留の軍隊・基地拠点地域のうち，調査を行った広島県呉市，山口県岩国市，沖縄県（那覇市と沖縄市）で，敗戦以降，これらの都市で発行された新聞記事の大見出しおよび小見出しを分析した。この分析から，軍隊・基地周辺の売春街を抱えた遊興街や，遊興街をめぐる多様な人々がどのように描かれ・表象されたかを考察し，敗戦後の日本の都市空間がどう描かれたかを明らかにした。

作業手順は，まず，1950 年代を中心に，遊興街をめぐるおもな行為主体（遊興街の女性，進駐軍・駐留軍の兵士，地域住民，行政・警察・保健所など）に関連した新聞記事の大見出し・小見出しを抜き出し年表として整理し，研究対象地域における当時の状況を把握した。年表だけでは遊興街をめぐる行為主体間の関係性がうまく掴めないので，大見出し・小見出しにあるワードを行為主体別に整理した。ここでは，紙面の都合上，呉市内の遊興街に関連する記事見出しを行為主体別に整理した図１のみを示す。なお，新聞記事は「中国日報」を使用した。

呉市には，明治 22（1889）年に大日本帝国海軍の鎮守府が置かれた。終戦後，進駐軍は一部焼け残った鎮守府施設を接収し，復興業務を行うための拠点とした。終戦直後から米軍が進駐するも，数ヶ月で英連邦空軍（英・豪・インド・ニュージーランド）の進駐に替わり，その後 1950 年に始まる朝鮮戦争時には，呉市は戦争の中継基地として活気づき，講和条約発効後も駐留する兵士が置かれた。敗戦直後からの進駐軍兵士や，講和条約後の駐留軍兵士を当て込んだ売春街を含む遊興街が呉市内に数か所形成され，そこで身を売る売春女性たちの様子と同時に，そうした女性たちを市民がどう捉えていたのか，また行政・警察・保健所はどう対応していたのかを，「中国日報」は報じてきた。呉市では，売春女性を束ねる各業者が朝日会や乙女会という＜パンパン組合＞をつくり，集娼地区を形成していた。GHQ は，戦前の公娼制が業者等による女性への売春強要だったとして廃止する命を出すものの，経済的救済の観点から女性の自由意思による売春は否定しなかった。こうした背景のなか，呉行政は公娼制廃止後の風俗対策として特殊飲食店を指定して警察の特別の取り締まり対象とし，地域を限定して売春営業を許可した。他方，限定的に許可された地域以外で＜フリー＞として売春を行う街娼が，市中に多数存在していた。

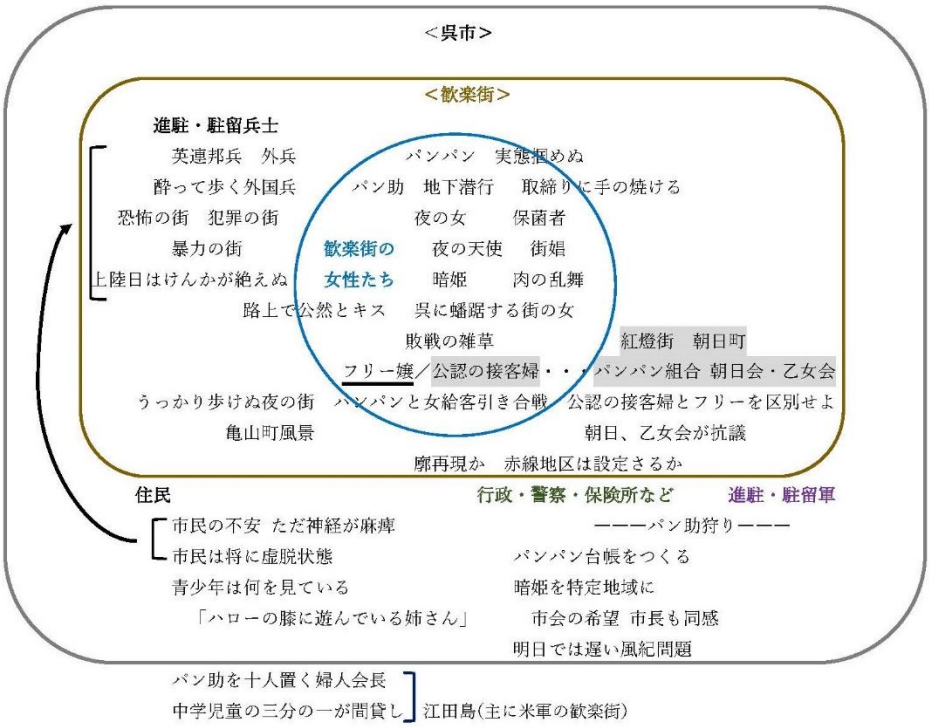

図１　広島県呉市内の遊興街に関連する記事見出し

遊興街の女性たちは，＜街娼＞＜パンパン＞＜パン助＞＜パン族＞と呼ばれたり，＜夜の女＞＜闇の女＞というように街の暗部の象徴として，また，＜春を売る＞＜袖を引く＞＜雑草＞のように表象された。＜辻姫＞＜夜の天使＞＜麗人＞としても表わされたが，これは言うまでもなく，姫・天使・麗人として好意的に受け入れられたわけではない。彼女たちを侮蔑・揶揄し否定する，悪意に満ちた言葉が新聞紙上に並んだといえる。売春街を含んだ遊興街で働く女性たちは，＜フリー嬢＞/＜公認の接客婦＞，＜パンパン＞/＜女給＞のように，二分されており，つまり，組合に属して性病検診を定期的に受けている「公認」の女性と，他方，検診の保証のない女性とに大別されていた。二つに分けられた女性たちには，空間的にも異なる活動範囲をもち，＜フリー嬢＞は当時の亀山町を，＜パンパン組合＞である朝日会や乙女会に所属する女性たちは朝日町周辺を，それぞれ拠点としていた。集娼地区の一方で，特定の地区に限定しない散娼の営業形態を取った売春女性たちによる団体で白鳥会というのも存在した。

進駐軍兵士や，さらに講和条約後の駐留軍兵士は，＜酔って歩く外国兵＞＜上陸日はけんかが絶えぬ＞＜街に夜の恐怖＞といったように，往々にしてよからぬ存在として描かれた。また，＜暴れる黒人＞＜白・黒の縄張り＞の記事見出しから，米本国でのレイシズムがそのまま日本にも持ち込まれ，遊興街において白人兵士と黒人兵士との縄張り争いが生じていたことが読み取れる。横行する兵士たちに加え，＜ゆすりたかりの輩＞＜大の大人も一人歩きは危ない＞など，街の暴力団の横行も報じられた。こうした記事見出しから，遊興街という空間がはらむ暴力性の問題が浮かび上がってくる。

売春女性，兵士，暴力団の存在が都市空間の社会的秩序を乱すとされ，それに対する管理・統制として，駐留軍からの強い要請で行政，警察，保健所が動いていた。＜パン助狩り＞＜闇の女狩り＞＜追い込み網でごっそり＞というように，「公認」でない売春女性は警察当局から「狩られる」対象である。保健所も加わり，売春女性の登録簿＜パンパン台帳＞が作成されていた。さらに，＜よき民族の育成＞のため，当時＜亡国病＞といわれた性病の撲滅を掲げ，「一般」の男女に結婚前の健康診断を奨励するなど，優生思想を彷彿させる記事もある。このように取締まりを強化した背景には進駐軍・駐留軍の存在があり，兵士への性病罹患防止を目的に，MP が警察に協力して「公認」でない売春女性の狩り込みが毎晩行われた。

地域の住民，とくに気になるのは当時の子どもたちが，戦後のこうした状況をどのように見ていたのか。＜あれがパンパン＞＜ハロー(米兵のこと)の膝に遊んでいる姉さん＞というように，遊興街の女性を冷ややかに見ていた子どもたちがいた一方で，＜夜の女をうらやむ子も＞いた。記事見出しの＜パン助を十人置く婦人会長＞のように，遊興街周辺の民家の多くは離れや母屋までも女性たちに貸し，その家賃収入を家計の足しにしていた。

（４）小括

戦後日本の都市空間は，戦勝・支配／敗戦・従属という国家間の政治レベルの権力関係が表れ

た場であった。それは，国家のレベルのみならず，さまざまな主体の間に発生する力関係の表出をともなったものである。戦勝/敗戦の結果は，都市空間に複雑で重層的な権力関係を生み出した。多様な人々の複雑に絡み合った権力関係が都市空間に映し出される過程として売春街を含んだ遊興街の形成を捉えることができ，ジェンダーやセクシュアリティは権力関係が組み込まれたきわめて政治的な概念であるからこそ，都市空間に刻まれた権力関係を暴き出す有用な視点なのである。

ミシェル・フーコー（[1975] 1977）が，身体は権力の対象ならびに標的として発見されたと述べているが，このことからも，身体とは権力の作用を受け，権力構造の中に置かれるものと捉えることができ，（３）の新聞記事見出しの分析から，とりわけ売春女性の身体には戦勝国側の権力が否応なく残忍に行使されたことが明らかとなった。

＜引用文献＞

① 大越愛子 2005．戦後思想のパラドックス．大越愛子・井桁 碧 編著『戦後・暴力・ジェンダー 1　戦後思想のポリティクス』青弓社，24-58.
② 菊地夏野 2010．『ポストコロニアリズムとジェンダー』青弓社．
③ 坪井秀人 2018．序言．坪井秀人 編『戦後日本を読みかえる第１巻 敗戦と占領』臨川書店，ⅰ-ix．
④ 平井和子 2014.『フロンティア現代史 日本占領とジェンダー―米軍・売買春と日本女性たち』有志社．
⑤ フーコー，M. 著，田村 俶 訳 1977.『監獄の誕生―監視と処罰』新潮社. Foucault，M. 1975. *Surveiller et punir：Naissance de la prison.* GALLIMARD.
⑥ 松下孝昭 2013.『軍隊を誘致せよ―陸海軍と都市形成』吉川弘文館.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 吉田 容子	４．巻 41-4
２．論文標題 地図・グラフからみるジェンダー不平等	５．発行年 2022年
３．雑誌名 地図情報	６．最初と最後の頁 4-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 吉田 容子	４．巻 73
２．論文標題 ジョニー シーガー著（中澤高志・大城直樹・荒又美陽・中川秀一・三浦尚子訳）『女性の世界地図―女たちの経験・現在地・これから―』	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Japanese Journal of Human Geography	６．最初と最後の頁 216-217
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4200/jjhg.73.02_216	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 吉田容子	４．巻 5
２．論文標題 敗戦後の日本の都市空間はどう描かれたか－当時の新聞記事見出しを資料として－	５．発行年 2021年
３．雑誌名 アジア・ジェンダー文化学研究	６．最初と最後の頁 31-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Yoshida Yoko	４．巻 26
２．論文標題 Gender geography in Japan: the trajectory, fruits of research and future challenges	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Gender, Place & Culture	６．最初と最後の頁 1～10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/0966369X.2018.1552929	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 吉田容子	４．巻 20-7
２．論文標題 城下町大和郡山の空間構造	５．発行年 2017年
３．雑誌名 月刊大和路ならら	６．最初と最後の頁 38-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 吉田容子
２．発表標題 敗戦後の日本の都市空間はどう描かれたか－当時の新聞記事見出しを資料として－
３．学会等名 奈良女子大学アジア・ジェンダー文化学研究センター
４．発表年 2020年

１．発表者名 吉田容子
２．発表標題 都市空間における身体と権力
３．学会等名 人文地理学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 吉田容子
２．発表標題 グローバリゼーションの進展と女性を取り巻く環境の変化
３．学会等名 日本学術会議公開シンポジウム
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yoko Yoshida
２．発表標題 Occupation forces and prostitution in Japan after World War II
３．学会等名 The 2018 IGU Regional Conference（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計4件

１．著者名 吉田容子（阿部和俊編著）	４．発行年 2024年
２．出版社 古今書院	５．総ページ数 653
３．書名 『日本の都市地理学研究』Ⅳ２「都市のジェンダー研究」pp.296-308	

１．著者名 吉田容子（吉田容子・影山穂波編著）	４．発行年 2024年
２．出版社 古今書院	５．総ページ数 163
３．書名 『ジェンダーの視点でよむ都市空間』第７章「政治権力とセクシュアリティー都市空間における売春街の形成」pp.78-91	

１．著者名 吉田容子（吉田容子・影山穂波編著）	４．発行年 2024年
２．出版社 古今書院	５．総ページ数 163
３．書名 『ジェンダーの視点でよむ都市空間』第１章「なぜ地理学にジェンダーの視点が必要なのか」pp.1-11	

１．著者名 吉田容子（浅田晴久編著）	４．発行年 2022年
２．出版社 かもがわ出版	５．総ページ数 162
３．書名 『地図で読み解く奈良』第4章「大和郡山ー都市空間の歴史」pp.80-97	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関